

幼稚園教育実習における「指導能力」向上のための方策

—自己評価と実習成績評価の比較からの考察—

井 上 充 子

Strategies for advancement of

“Teaching ability” in kindergarten practice teaching

—One consideration about comparing self-evaluation with performance evaluation—

Mitsuko Inoue

豊岡短期大学 論集

第 14 号 別 冊

平成 30 年 2 月 28 日 発 行

幼稚園教育実習における「指導能力」向上のための方策

—自己評価と実習成績評価の比較からの考察—

Strategies for advancement of
 “Teaching ability” in kindergarten practice teaching
 —One consideration about comparing self-evaluation with
 performance evaluation—

井上 充子

Mitsuko Inoue

はじめに

保育は、理論的裏付けに基づいた実践によって成り立つものである。実習では、養成校の教育課程に沿って学習してきた理論（知識・技能・技術）を、実際の保育現場で体験して確認し、教育実践力や実践的指導力の基礎を習得することが教育実習の意義である¹⁾。

本校子ども心理学科は3年制の学科であり、幼稚園教育実習は、3年次の5月下旬から6月下旬までの4週間の期間で、実施されている(表-1)。1年次と2年次は、2週間の保育実習(保育園)2回と保育実習(施設)1回を行い、それらの実績と反省を踏まえ、3年次の教育実習(幼稚園)となる。

表-1. 本校における幼稚園教育実習の概要

ねらい	幼稚園の生活に参加して、幼児の実態を把握し、生活や遊びなどのいろいろな場面における幼児の活動、子どもの表情及び心理面を理解する。また、教育の指導方法や指導案、環境構成等を学ぶ。			
実習の時期		1年次	2年次	3年次
	前期	6月 職場体験1日 (姉妹校幼稚園)	7月 職場体験1日 (付帯施設・学内小規模保育園)	6月 教育実習(幼稚園) 4週間
	後期	2月 保育実習(保育園) 2週間	9月 保育実習(施設)2週間 1月 保育実習(保育園)2週間	

保育実習と教育実習の違いこそあれ、学生にとって幼稚園教育実習は3年間の集大成となる実習であり、幼稚園の魅力ややりがいを見出しつつ自らの課題を明確にすることに加え、実質的に職務として従事して行けるかも決めていかなくてはならないものなのである。

このように教育実習は、3度目の大きな実習であるにもかかわらず、実習前の学生は口々に不安を漏らす。実習中の現実的な課題や、事前理解の必要な個々の学習内容に関する不安の他にも、自らの不安の内実を明確に認識できないまま、多くの気がかりや心配が輻輳した掘み所のない不安感を徒に募らせているケースも少なくない²⁾。そうした実習生の不安感を低減させるために、「指導能力」についての学びを深め、身に付けておくことは重要であると考ええる。

本稿は、実習開始時の精神的不安感を軽減する養成校の学習方法を探るため、実習後の学生による自己評価と実習成績表を比較することによって学生の課題を明確にし、「指導能力」の向上をはかる指導のあり方を考察することを目的にする。具体的には、これまで身に付けた知識・技術をもって学生が教育実習に臨むにあたり、①教育実習事前指導の指導計画・指導内容は、学生の課題を克服することに貢献しているか、②教育実習では、学生が学んでおきたいと考えている内容が学べているのか等を実習前後の学生からの個別ヒアリングと教員に対するグループヒアリングから検証し、今後の指導方針を見出している。

1. 学生による自己評価と成績評価票の比較

表-2は、4週間の幼稚園教育実習終了後の本校3年生を対象に、実習終了後から1週間以内に、事後指導と振り返りを兼ね、実習自己評価に関する調査を実施し、自己評価の回答内容と実習園からの成績評価票との比較分析を行ったものである。この比較分析をとおして、学生自身が自らの実習をどのように評価するのか、自己課題が成績評価と結びつき、今後の学習に有効な情報となっているのかを検証した。

尚、自己評価の着眼点は成績評価票の項目と相違なく行ったが、自己分析しやすいよう、評価段階「十分できた・できた・大体できた・努力が必要・かなり努力が必要」の5段階とした。

比較分析に際しては、事前指導の学習態度や課題提出の成果から、「指導能力」(指導計画、教材研究)において、自己評価の満足度と成績評価票の努力点に差が生じるという仮説を立てた。これは、「具体的な教育課程や子どもの生活及び発達の見通しを持たないなかで作成した学生の指導案は、机上の空論の域を脱しえないのも事実である」³⁾、「部分実習・責任(全日)実習のような、指導計画や遂行を任されて指導責任を負う活動について、不安水準が最も高く示された」⁴⁾等、数々の先行研究では、教育実習生の指導案作成が大きな課題となることを示しているからである。また、少ない情報の中で幼児理解の浅い学生が立てる指導案が、現場教師の求める指導の水準には届かず、教育実習生が苦勞する姿を実習巡回では目の当たりにするからである。

しかし、比較分析の結果は、仮説に反するものであった。そこで、その要因を再分析した。

表-2. 「教育実習における自己評価と成績評価票の比較表

項目	着 眼 点			評 価				
				とても優れている	優れている	普通	努力が必要	かなり努力が必要
資 質	思 い や り	子どもだけでなく大人や動植物すべてに対して思いやりが持てる	自己評価	28	8	24	0	0
			成績評価	8	36	56	0	0
	明 朗 性	いつも笑顔で明るく朗らかにかわれた	自己評価	68	20	12	0	0
			成績評価	16	44	36	4	0
	こ と ば づ か い	わかりやすく、温かみのある話し方が出来た	自己評価	0	52	40	8	0
			成績評価	0	36	56	8	0
	身 だ し な み	指導者としていつもよく整っている	自己評価	44	24	28	4	0
			成績評価	20	28	52	0	0
	人 間 関 係	誰とでもよくかわることが出来る	自己評価	28	48	20	4	0
			成績評価	8	48	44	0	0
指 導 能 力	指導計画と準備	指導のねらいを正しく捉え、準備を周到にできた	自己評価	8	12	44	32	4
			成績評価	4	20	44	32	0
	指 導 内 容 の 研 究 と 技 術	教材研究を的確に行い、指導能力が優れている	自己評価	4	12	44	36	4
			成績評価	4	20	44	32	0
	幼 児 に 対 す る 愛 情 と 理 解	常に思いやりのある態度で接し個々の幼児の発達や気持ちをよく理解しようとする	自己評価	16	44	40	0	0
			成績評価	8	40	48	4	0
	機敏性と責任感	指導者として機敏に動き、仕事を最後まできちんと行う	自己評価	20	52	28	0	0
			成績評価	16	28	52	4	0
実 習 態 度	指 導 を 受 け る 姿 勢	礼儀正しく、謙虚に受け止めて実行する	自己評価	20	56	24	0	0
			成績評価	16	48	36	0	0
	実 習 意 欲	積極的に指導を受け、保育者として意欲的に取り組む	自己評価	24	44	24	8	0
			成績評価	12	24	60	4	0
	環 境 構 成	安全面の配慮や保育環境を整えることができる	自己評価	12	20	64	4	0
			成績評価	0	16	64	16	0
	実 習 記 録	熱心によく記録を取り、誤字脱字もなく課題意識を持っている	自己評価	0	16	44	40	0
			成績評価	4	20	36	40	0
	出 勤 状 況	遅刻・欠席がなく、時間前に出勤できる	自己評価	84	12	0	4	0
			成績評価	60	24	16	0	0

まず、注目すべき点は、保育の現場で教師として子どもたちとかわるにあたり、根本的に一番必要不可欠な要素である「資質」に関して、学生の自己評価と成績評価票の間にアンバランスがあった点である。学生は、“思いやり・明朗性”に対して最善を心掛けた努力に対して（十分できた）もしくは（できた）と高い評価を出している。しかしながら、実習園の評価としては認められておらず、この差は予想以上であった。この結果から、学生の認識の甘さと保育の現場で必要とされる人材資質の高さを確認できる。

この傾向は実習巡回時にも見受けられる。実習生は園児と対面している時はいきいきした表情であっても、目の前に園児の姿がなくなると、現場実習中であることへの意識が薄れ、気が抜けた疲れた表情を見せる。付け焼刃的な心のない笑顔は現場で通用しない。実習指導教諭はその点もしっかりと見てくださっていることを感謝するとともに、現場に入っているにもかかわらず、緊張感と充実感の足りない学生の姿を反省しなくてはならない。

また、同じ傾向が「身だしなみ」の項目でも表れている。学生の感覚で保育現場を意識した服装や髪型や身なりであっても、専門職である実習指導教諭からは不適切と評価される。見栄えをよくするだけでなく、保護者から見ても「子どもを預ける先生として安心できる人格者である」と認めて頂けるだけの身だしなみを整える自覚がなくてはならない。

実習期間中、幼児と共に毎日を過ごすうえでは、子どもたちの手本となる姿勢を心掛けることが基本である。実習生といえども保護者は幼稚園の教職員の一人として見ていることを忘れず、園児にとっては学生ではなく先生である事を自覚し、責任のある行動をとるよう努めなくてはならないのである。

この評価項目に関しては、今後学生指導の重大な課題と認識し、日頃の生活態度から見直し、「社会人として通用する人材」の育成に向けた改善策を立てていかななくてはいけないことが明確となった。

2. 実習前後の不安や要望から見える「指導能力」学習不足

次に、「指導能力」の項目である。“指導計画と準備”、“指導内容の研究と技術”、“実習記録”に目を向けると、自己評価と成績評価票の間にアンバランスはなかったが、成績評価票のみを見ると評価の低さは明らかである。

そこで、学習の不足部分に目を向け、有効な授業の進め方を考察するため、教育実習前の2年生を対象にし、「実習前にあなたが不安に思うことは何ですか」をテーマにした個別ヒアリングを行い、ひとりひとりの実習に対する不安や要望を聞き取った。ヒアリングに際しては、学生が入り易いよう、「それぞれがどのような壁を感じているのか」と「不安解消の手立て」が主な内容であることを事前に伝える半構造化面接法を採った。

表-3. 実習前アンケート 「実習前にあなたが不安に思うこと何ですか」 ※複数回答あり

順位	項 目	割合	不安解消の手立て（自己申請）
1	ピアノ	16 人 25 人中	・指が覚えるまで繰り返し練習する ・日々の練習の積み重ねが大切
2	部分実習・責任実習・指導案	14 人 25 人中	・授業での理論をきちんと理解する ・年齢ごとの育ちや幼児理解が出来るようにする ・子どもが興味を示し関心を引く導入を工夫する ・教材研究や事前準備等環境構成をしっかりと行う
3	日誌	10 人 25 人中	・メモを取る等大切な事項を忘れないように工夫する ・園ごとの特徴があるので事前オリエンテーションで聞いて理解しておく
3	指導教員とのかかわり	10 人 25 人中	・笑顔で明るく挨拶をする ・積極的に質問をするなどコミュニケーションを取る
5	子どもとのかかわり	8 人 25 人中	・名前を早く覚え、年齢に合った接し方をする ・担任の先生から子どもについての情報を聞いておく ・子どもの気持ちをまず受け止める
6	その他（体力他）	4 人 25 人中	・日頃から体調管理をし、体力作りをする ・失敗してもうまく気持ちを切り替える

ヒアリング内容をまとめた表-3を見ると、不安要素の1位に“ピアノ”があがった。これは、「入学前に全くピアノに触ったことがなかった」、「入学が決まってから習い始めた」学生が約3割を占めている現状からは想定されていた。演奏するだけでなく、子どもの声に合わせての『弾き歌い』は、初心者にとって一層ハードルが高い。

ピアノに関しては練習あるのみであり、積極的に練習に取り組むほか手立てはない。言い換えれば、個々のレベルにあわせた個別指導により、それぞれの学習の達成度を向上させていくものである。ただ、ここに「できない」、「難しい」という苦痛ばかりが強調されては、ピアノが苦手な学生の向上心は引き出せない。

たとえば、保育実習では、子ども達が保育者のピアノに合わせ“楽しく、嬉しそうに、元気に”歌う姿を学生は目にしているはずである。この経験を「あんな技術は自分がない」と否定的に捕らえるか、「子どもが歌う声や笑顔が思い浮かぶ」と肯定的に捕らえるかが分岐点になる。後者を引き出せる練習環境が必要であることはいうまでもない。

加えて、保育技術の向上を図るためには指導計画や教材研究の充実は不可欠である。実習前に「部分実習・責任実習・指導案」に関する項目に不安だと答えた学生の多くは、教育課程や教育計画に対

する知識と理解不足が根本にはあるが、一方では、過去の保育実習において受けた指導や指摘の意図が理解できないまま現在に至っている場合や、辛かった記憶のまま否定的に捉えていることも少なくない。では、教育実習事前指導で、どのような授業が学生の必要とする技術や方法、知識に結びついていくのであろうか。

そこで、「実習前にもっとこういう事を教えて欲しかった」という要望や意見をまとめたものが表-4である。この表-4を踏まえ、「実習前の不安に思うこと」と「実習後に学習が不足だったと感じる部分」とを比較分析し、教育実習事前指導の中で強化すべき学習項目を明らかにした。

表-4. 「実習前にもっとこういう事を教えて欲しかった」

項 目	内 容
教材研究	・教材研究の意義 ・事前の教材研究が不十分だった ・教材研究の大切さ
指導案	・ねらいと内容の考え方 ・ねらいに基づいた活動とはどういうものか ・環境構成の書き方 ・年齢ごとの育ちの違いによる時間配分 ・週案の書き方 ・責任実習・部分実習、それぞれの内容についてもっと詳細に
日 誌	・エピソード記述の実習記録への書き方 ・教師の援助と実習生の動きの効率的な記述方法
その他	・年齢ごとの遊びの案 ・手遊びのレパートリーを増やす

表-4を見ると、多くの学生が実習中に週案・指導案に苦戦したことが分かる。毎年、実習前に指導案作成への不安の声が多く聞かれるため、教育実習指導でも指導案作成には重点をおき、「事例を挙げる」、「指導案の例を参考にグループワーク等で加筆や訂正を入れる」、「模擬保育から指導案を立てる」等の方法で書き方の基本や応用を学んだ上で、「1 から指導案を立ててみる」という段階を踏む学習の流れをとっている。このように、指導案に関しては授業でも時間を多く費やし、課題提出や添削を重ねているにもかかわらず、自力で書き上げる力が付いていなかったことがわかる。

そこで、この結果をテーマにし、本校教員に対するグループヒアリングを行ったところ、以下のよう聞き取りができた。

そもそも指導案を立てるにあたり、“書けない”という学生の行き詰まり方を見ると、子どもの姿

が想像できていないことが挙げられる。まず、題材選びをみても、子どもの実態が掴めていなければ子どもたちの興味・関心が今どこにあるのかが分からないため、何が楽しめるのか思い浮かばない。また、クラスの子どもの個人差や発達の段階が理解できていなければ、個々の子どもへの配慮が分からないことに加え、どのような環境構成・援助をしていくかの具体的なイメージが湧かないということになる。

実習指導案は、机上の理論のみで書くことは到底できないことであり、基本的な理論を理解し、それを幼児の実態にあわせて組み上げるものである。子どもの遊び・生活は日々変化し、興味・関心もタイミングをずらすと成果は半減してしまう。子ども達と共に生活する中でどのような遊びをしているのかをよく観察し、題材選びのヒントを見つけられるようにしなくてはならない⁵⁾。また、月や週の生活の流れについてもクラスの現状を理解する必要があるため、実習園の月案や週案を見せていただき、「生活の流れの中での一日」として立案の参考とすることも大切になる。

おおよそ「学習する」・「学ぶ」ためには、学ぶ側に主体性、自主性が不可欠となる。自ら課題意識を持ち、自らの意志で「学ぶ」姿勢を持たなければならない。主体性・自主性を持つためには、学ぶことの「楽しさ」「おもしろさ」、また、「必然性」や「大切さ」を体験できることが必要である。教育実習事前指導において、日誌・指導案の作成は、「やらされている」「やらなきゃいけないから」ではなく、子どもの前に立つとき保育者として「身に付けておかなければならない事、最低限必要なこと」という自己プレッシャーをかけながら、積極的に学ぶべき学習内容のはずである。そのためにも「実習日誌は何のために書くのか」明確に意識化すべきである。

実習前の不安要素に日誌を挙げている学生の多くが、実習日誌を書くことに時間かかるため睡眠時間が無くなることを挙げる。だが、睡眠時間が取れないことに反して、筆が進めば時間を要しても苦痛ばかりは残らないだろう。書くことに意味を見出せず、「書かされている」思いで「しかたなく」書いていては、時間もかかり苦痛なだけである⁶⁾。では、どうすれば意味を見出せるのかである。

実習日誌を毎日書くことは、子どもの成長・発達を豊かにし得る保育者となっていくために必須の営みである⁷⁾。保育者として知識も幼児理解も未熟な教育実習生が、生きた学習を得られる教育現場での機会を最大限に活かし、自ら成長していくための貴重な体験をひとつひとつ書き留める意識を持って記録をとるべきであると考え。実習の中での自分自身の言葉、意識、行動を省みて、子どもの活動の受けとめ方や子どもに対するかかわり方を改めていく機会を作り、反省と振り返りを冷静に吟味するために書くものである。自分自身の課題を持ち、今日の実習を明日の実習につなげていくという思いが持てれば、意識が変わっていくのではないだろうか。実習日誌は、子ども達の毎日の笑顔の為に必要不可欠なものと捉えて取り組む必要がある。

同様の配慮が「教材研究」でも重要になる。幼稚園教育における教材研究には、①指導内容と関連における教材の選定・構成、②実際の活動における指導案、③指導内容・教材に関する文化・特性、④一般的な幼児の発達、⑤園の在籍する幼児の特徴・個性、⑥幼児に即した柔軟な対応、の観点が重

要となると言える⁸⁾。

実習生が熟慮のうえ提案した題材が認められず、書き直しになることも多い。採用されなかった理由を明確にすることにより、次の課題へとつなげられると考える。

表-5. 「教育実習における部分実習・責任実習、活動案(題材)について」

書き直しになった活動	理 由
水鉄砲作り(的当てゲーム)	遠足で水族館へ行ったので、それに繋がる活動をして欲しい
さかなつりゲーム	他の実習生がやっていた、すでにやったことがある
貨物列車ゲーム	園児の様子に合わせ、できるか確認をしてから書く
あじさい作り	似たようなものをすでに制作済み
ボール運びゲーム	難しすぎた、もっと簡単に直した
かたつむりとあじさい作り	園児が技法の“絵の具飛ばし”の経験がないため
新聞紙ちぎり	主活動として物足りない
しっぽとりゲーム	実習期間中、体を動かす活動が多すぎる
ぴよんぴよんかえる	年齢が合っていない
パタパタ風船ゲーム	風船の数とうちわの数が不明確
手つなぎ鬼	全員が参加できない(障害のある子のいるクラス)
人間すごろく	文字が読めない、書けない→園児の実態に合っていない
しゃぼん玉遊び・鬼のお面制作	園全体で行う活動になっているから
けいさつとどろぼう	ルールを工夫した方が楽しめる
シール貼りゲーム	遊具を使う遊びで走るのは危険
フルーツバスケット・じゃんけん列車	みんな知っている遊びなので知らない遊びの方がいい
魚の的当てゲーム	ねらいと内容が不十分だった

そこで、「教材研究」の方向性を探るため、今年度実際に学生が提案した題材をまとめたものが、表-5である。

表-5では、書き直しになった活動とその理由として、「園児の実態に合っていない」、「園生活の流れ(全体)に合っていない」という指導が挙げられている。また、ポピュラー過ぎて園児はすでに経験済みの為、変更を指導されることも多い。実習園の様子・園児の実態を理解し、それらに合わせ構成することができれば、前述の書き直しとなった活動も工夫次第で実施することが出来たのではないだろうかと考える。子どもに沿った魅力的な活動は、生き生きとした保育となる⁹⁾。そのような活動を短期間に実習の中で見出す視野を広げるために、事前指導では学生が自ら考え、対象クラスの保育の

流れや園児の状況を十分考慮し、試作を作ったり、手直しを繰り返しいろいろ試したり、試行錯誤しながら取り組むことが必要と考える。

また、教員から、“与えすぎ”てはいないかも課題である。教える側からの発信が多すぎでは、学生は受け身だけの作業になってしまう。ひとつの「テーマ」や「ねらい」、「対象年齢」のみを提示、もしくは「素材」、「季節」のみを提示し、各々が子どもの姿を思い浮かべ、考えながら試し、失敗しながら指導案を作り上げる力を付けなければいけないと考える。

加えて、幼児理解の知識を現場での園児の様子に照らし合わせ、想像力を働かせ教材研究に取り組む必要がある。教材研究の重要性や必要性は強く感じている学生が多いことは、今後学習を進めるにあたっての有効な学びに繋がることが期待される。

3. まとめと今後の課題

本稿では、本校実習生の事前指導において、実習前に実習日誌・指導案への不安の声が多いことから、実習開始時の精神的不安感を軽減するため、教育実習における「指導能力」を向上させる学習方法を探索した。仮説として、成績評価票「指導能力」の項目において、自己評価の満足度と成績評価の努力点に差が生じることを想定した。しかし、比較分析の結果は、仮説に反するものだった。

そこで、その要因を再分析したところ、実習生は、未熟・力不足・技術不足を自覚しながら、学ぶ意欲は旺盛であり、貪欲にかつ謙虚に前向きな努力を重ねており、助言を受けながら現場での4週間の有意義に学び、成長が見られたことを評価していることが分かった。「指導能力」は実習期間で完遂するはずもなく、今後、保育現場で経験を重ねる中で習熟していけるものであり、現時点での学びの姿勢が評価に結びついていると言える。

このように、実習生の自己評価も低く、実習後も「もっと教えてほしかった」と訴える状況は、「指導能力」を向上させる実習指導の必要性を示しているといえる。同時に、養成校において、理論（知識・技能・技術）を実践の場“幼稚園”と結び付け、指導力として身に付けるかを検討していく機会となった。

また、本稿での比較分析をとおして、実習生に不足しているものは、自己評価では「よくできている・頑張った」と考えている資質的な面、「表情・思いやり・明朗性・言葉遣い」であり、専門職としての認識の甘さであることが分かった。この結果は、生活態度の見直しから「職業倫理」の認識と指導のあり方を再考する機会となった。

最後に、今後の課題として以下の3点を挙げておく。

1点目は、1年次より「教材研究」を単独教科として位置付け、現場で即戦力となる知識と技術を学生が身に付けるよう指導することである。

2点目は、この「教材研究」は、全体授業での一斉指導ではなく、少人数での個別指導を重視し、1対1での会話をとおして、その場で疑問の残る箇所・理解できない箇所・改善点等を理解しつつ進

めることである。

また、幼稚園への就職後、3年以内の離職者も少なくない現状から、学生個々の自我同一性（アイデンティティ）確立への手助けになる指導能力を高めるための実習指導を進めることが3点目の課題である。

お わ り に

教育実習は、偉大である。4週間の教育実習を終え帰校した学生たちの成長と生き生きとした表情は、毎回目を見張るものがある。目的意識を持つこと・物事を理論付けて考えること・子ども第一に考える思考回路・社会のルールやマナーへの自覚・周囲への気配りを身に付けて帰ってくるのである。学生は、実習園が実習生を受け入れることでどれ程の負担があるか思い描き、感謝の気持ちを忘れずに、謙虚な気持ちで実習に取り組み学ぶ姿勢を大事にしたい。

本稿作成にあたり、ご協力いただいた幼稚園、実習生、助言を頂いた磯野先生、学習サポート校である豊岡短期大学に心から謝意を申し上げたい。

引 用 文 献

- 1) 田治米富子・堀和弘編『幼稚園教育実習事前・事後指導（改訂版）』 P5~18 豊岡短期大学通信教育部 2016
- 2)、4) 長谷部比呂美『保育実習に関する学生の意識について－実習不安を中心として－』淑徳短期大学研究紀要 第46号 P81~96 2007
- 3) 奥村典子『保育者養成校における短期指導計画作成に関する教授法の検討』関東短期大学紀要 第56集 P31~50 2014
- 5) 6) 7) 民秋言・安藤和彦・米谷光弘・上月素子編『（新保育ライブラリ 保育の現場を知る）幼稚園実習』 P2-89 北大路書房 2009.
- 8) 中川智之『幼稚園教諭養成課程における教材研究力の育成に関する一考察－「幼児期から児童期への教育」の分析を通して－』川崎医療短期大学紀要 第35号 P71~77 2015
- 9) 碓井幸子『幼児教育を学ぶ学生の保育実践力を養う教材研究の方法と課題』清泉女学院短期大学紀要、第35号 P1~11 2017

参 考 文 献

- 1) 塚田まゆみ『幼稚園教育実習の現状』鹿児島純心女子大学研究紀要 第38号 P63-73 2008.